

習熟度別にみた T 大学 1 年生の英語力の変化

To What Extent Do English Proficiency Levels of First-year Students
in T University Change During the Academic Year?目 時 光 紀¹⁾

Mitsutada METOKI

本稿では、T 大学看護栄養学部に在籍する 1 年生（看護学科 86 名、栄養学科 91 名）の英語力の変化について報告する。現在、T 大学では 4 月にプレイスメントテスト（G-TELP Level 4）を実施し、リーディングとライティング主体の英語 I は 3 つのレベル（上級・中級・初級）に、リスニングとスピーキング主体のオーラルイングリッシュ I は 2 つのレベル（上級・初級）に学生を分けて授業を行っている。また、前期と後期の学期末に到達度テスト（G-TELP Level 4）を実施し、英語力の伸長度も測定している。本調査では、テスト間の得点の変化を学科別・習熟度別・科目別に比較した。平均点と標準偏差を算出後、一要因分散分析（対応あり）と多重比較を行った結果、看護学科では、英語 I の中級クラスと初級クラス、オーラルイングリッシュ I の初級クラス、栄養学科でも、英語 I の中級クラスと初級クラス、オーラルイングリッシュ I の初級クラスで統計的に有意な得点の上昇がプレイスメントテストと後期到達度テストの間で見られた。ただ、大幅な得点の上昇が確認できたのはプレイスメントテストと前期到達度テストの間で、両学科・両科目とも初級クラスであった。結果として、習熟度別クラス編成は学力の低い学生に効果があることが示唆された。

This paper researches to what extent English proficiency levels of first-year students in T University change during the academic year. T University offers first-year students two English courses: English 1, which focuses on reading and writing skills; and Oral English 1, which focuses on listening and speaking skills. English 1 is divided into three proficiency levels: advanced, intermediate and beginner. Oral English 1 is also divided into two proficiency levels: advanced and beginner. G-TELP Level 4 is given to the students three times during the academic year, first as a placement test before the first semester begins, second at the end of the first semester, and third at the end of the second semester. In this study, scores of the tests were analyzed according to the college major, proficiency levels, and courses by ANOVA and Multiple Comparison. Findings suggest proficiency-based classes work most effectively for low-proficiency level students.

1) 天使大学 看護栄養学部 教養教育科

(2014 年 1 月 8 日受稿、2014 年 6 月 4 日審査終了受理)

はじめに

18 歳人口の低下と進学率の上昇は、大学のユニバーサル化を進めている。大学全入時代に入り、様々な形式で入学者を選抜する大学が増えている。これにより、学生間の学力格差が大きくなり、授業が成立しないなど悪い影響が出始めている（佐藤，2010）¹⁾。

入学した学生の英語力の差も大きくなりつつある。小野（2006）は、大学入試の多様化により学生の英語力が二極分化していると指摘している²⁾。

英語力の格差は、習熟度別授業実施校の増加へと繋がっている。大学英語教育学会実態調査委員会（2002）の調査によると、2001 年度に習熟度別授業が行われていた大学は 34.4% だった³⁾。そして、1 年後の杉森（2003）の調査によると、習熟度別授業が 63% の大学（短期大学も含む）で行われていた⁴⁾。これは、習熟度別授業を行う大学が急激に増えていることを示している。

プレイスメントテストを実施して習熟度別授業を行う大学が増える一方、到達度テストを学期末に実施し、英語力の伸長度を測定している大学は、まだまだ多くはない。また、1 年間の英語力の変化を習熟度別に調査した研究論文も非常に少ない。したがって、本研究では入学時から 1 年次後期終了時までの学生の英語力の変化を学科別・習熟度別・科目別に調査した。

本論は以下 5 つの部分から成る。Ⅰ. 先行研究 Ⅱ. T 大学の英語カリキュラム Ⅲ. 研究方法 Ⅳ. 結果 Ⅴ. 考察 Ⅵ. 今後の課題

Ⅰ. 先行研究

前述した通り、プレイスメントテストを実施して習熟度別授業を行う大学が増える一方、学期末に到達度テストを実施し、英語力の伸長度を検証している大学は少ない。また、プレイスメントテストと到達度テストを実施し、学生の英語力の変化などを調査した論文も非常に少ない。学生の英語力の変化は、個人情報上の 1 つであり、そのこと

が論文として結果を発表することの妨げとなっている可能性は否定できない。

ただ、論文が全く存在しないわけではない。小笠原（2011）は、N 大学工学部の 2 年生 184 名に対し、グラマーセクション（22 問 20 分、100 点）、リスニングセクション（24 問 20 分、100 点）、リーディング・ボキャブラリーセクション（24 問 35 分、100 点）で構成され、難易度が英検準 2 級から 2 級程度と言われている G-TELP Level 3（Form 315）をプレテストとして実施し、上位クラス（2 クラス）・中位クラス（2 クラス）・下位クラス（1 クラス）に学生を分けて授業を行った。授業内容と使用教材はレベル毎に設定した。そして、学期末にポストテストとして再度 G-TELP Level 3

（Form 319）を実施し、プレテストの平均点とポストテストの平均点の間に統計的な有意差があるかどうか、t 検定を用いて調査した。結果は、中位クラスにおいてグラマーセクションの得点が上昇し、統計的な有意差も見られた。また下位クラスでも、グラマーセクション、リーディング・ボキャブラリーセクション、合計点で得点が上昇し、統計的な有意差も見られた。この調査によって、習熟度別授業は上位クラスよりも下位クラスに効果があることが示唆された⁵⁾。

また小笠原（2013）は、N 大学の各学部の 1 年生 1470 名に G-TELP Level 3（Form 312）を前期の学期末に、G-TELP Level 3（Form 319）を後期の学期末に実施し、両テストの平均値の間に統計的な有意差があるかどうかを調査した。結果は、大学全体で合計点を含め、グラマーセクション、リスニングセクション、リーディング・ボキャブラリーセクションの得点が上昇し、統計的な有意差も見られた。ただ、学部学科によっては結果が異なっており、T 大学の看護学科に領域に近い保健学科（100 名）では、リスニングセクションの得点は上昇し、統計的な有意差も見られたが、合計点も含め、他のセクションでは統計的に有意な得点の上昇は見られなかった⁶⁾。

ところで、小笠原（2011）の研究では、T大学が使用している Level 4 よりも 1 ランクレベルが高い G-TELP Level 3 が英語力の測定に使われている⁵⁾。また、T大学では1年生に対して習熟度別授業を行っているが、小笠原（2011）の調査対象は2年生であった⁵⁾。また、小笠原（2013）では工学部および水産学部の学生を除き、調査対象は習熟度別授業を受けておらず、調査期間も半期と短かった⁶⁾。

したがって、本研究ではT大学看護栄養学部（看護学科と栄養学科）に在籍する1年生の前期・後期に渡る英語力の伸長度をT大学がプレイスメントテストとして2004年度以来使用している G-TELP Level 4 を用いて学科別・習熟度クラス別・科目別に調査した。

II. T大学の英語カリキュラム

研究方法に触れる前にT大学の学科と在籍学生数について説明する。T大学は、看護学科と栄養学科から成る小規模大学である。看護学科の収容定員は1学年87名で栄養学科は85名である。栄養学科では3年次に5名の編入生を受け入れているため、3年次と4年次の収容定員は5名を加えた90名となっている。2012年度の在籍学生数は、各学年185名前後となっており、総学生数は743名であった。

次に、T大学の英語カリキュラムについて説明する。T大学では、1年次と2年次に英語科目が開講されている。1年次には、リーディングとライティングが主体の英語IA（前期開講）と英語IB（後期開講）、リスニングとスピーキングが主体のオーラルイングリッシュIA（前期開講）とオーラルイングリッシュIB（後期開講）が必修科目として開講されている。そして、2年次には、リーディングとライティングが主体の英語IIA（前期開講）と英語IIB（後期開講）、リスニングとスピーキングが主体のオーラルイングリッシュIIA（前期開講）とオーラルイングリッシュIIB（後期開講）

が選択科目として開講されている。

1年次開講科目は、前期の授業開始前に実施されるプレイスメントテスト（G-TELP Level 4）の結果により、英語Iは上級・中級・初級の3レベルに、オーラルイングリッシュIは上級・初級の2レベルに学生を分け、授業を行っている。G-TELP Level 4は、グラマーセクション（20問20分、100点）、リスニングセクション（20問15分、100点）、リーディング・ボキャブラリーセクション（20問30分、100点）で構成される英語力判別テストであり、難易度は英検3級程度と言われている。英語Iはグラマーセクションの得点とリーディング・ボキャブラリーセクションの得点の合計点（200点）、オーラルイングリッシュIはリスニングセクションの得点（100点）でクラス分けを行っている（表1）。

表1は、クラス分けとプレイスメントテストの得点の関係を示している。看護学科の学生のほうが栄養学科の学生よりも英語力が全般的に高いため、同じレベルでも学科によって得点が異なっている。例えば、英語I上級クラスの得点の範囲は、看護学科では170-195となっているのに対し、栄養学科では155-175となっている。もちろん、両学科とも同一の得点帯を用いてクラス分けを行うことが理想的だが、各クラスの履修者数を一定にする必要があるため得点幅の違いを許容している。

また、T大学では前期授業開始前のプレイスメントテストに加え、前期と後期の学期末にG-TELP Level 4を用いて到達度テストも実施している。

III. 研究方法

1. 調査対象

T大学では、2004年度よりG-TELP Level 4を用いてプレイスメントテストを実施し、習熟度別に授業を行っている。また、2011年度よりプレイスメントテストに加え、前期と後期の学期末にも到達度テストとしてG-TELP Level 4を実施し、試験

結果は最終評価の 20%に反映させている。

2012 年度の後期到達度テストを実施後、看護栄養学部の 1 年生 188 名に今回の研究に関する研究参加説明書および同意書が配布され、177 名（看

護学科 1 年生 86 名、栄養学科 1 年生 91 名）から同意書を回収した。したがって、今回の研究対象は T 大学に 2012 年度入学した 1 年生 177 名（看護学科 1 年生 86 名、栄養学科 1 年生 91 名）である。

表 1. 2012 年度の習熟度別クラスとプレイスメントテストの得点幅

科目名	クラス	G-TELP 得点利用セクション	G-TELP 得点幅
英語 I A 英語 I B	上級	グラマーセクション リーディング・ボキャ ブラリーセクション (200 点満点)	看護学科：170-195 栄養学科：155-175
	中級		看護学科：135-165 栄養学科：130-150
	初級		看護学科：60-130 栄養学科：65-125
オーラルイングリッシュ I A オーラルイングリッシュ I B	上級	リスニングセクション (100 点満点)	看護学科：60-80 栄養学科：55-85
	初級		看護学科：20-55 栄養学科：20-50

表 2. 調査対象者のクラス構成とクラスサイズ

科目	レベル	看護学科	栄養学科
英語 I	上級	23	31
	中級	29	26
	初級	28	31
合計		80	88
オーラル イングリッシュ I	上級	37	44
	初級	49	47
合計		86	91

表 2 は調査対象者のクラス構成とクラスサイズを表している。看護学科の調査対象者が 86 名となっているにもかかわらず、英語 I を履修している看護学科の学生数が 80 名となっているのは、6 名の学生が英語技能検定 2 級合格により英語 I の履修を免除されているからである。同様の理由で英語 I を履修している栄養学科の学生数も 3 名少ない 88 名となっている（表 2）。

英語 I もオーラルイングリッシュ I も週一回 90 分の授業で前期 15 回、後期 15 回、合計 30 回授業（オリエンテーションや期末試験を含む）が行われている。クラス数は、英語 I は上級 2 クラス（看護学科 1 クラス・栄養学科 1 クラス）、中級 2 クラス（看護学科 1 クラス・栄養学科 1 クラス）、初級 2 クラス（看護学科 1 クラス・栄養学科 1 クラス）、オーラルイングリッシュ I は上級 4 クラス

(看護学科2クラス・栄養学科2クラス)、初級4クラス(看護学科2クラス・栄養学科2クラス)となっている。2012年度は、英語Iの上級2クラス(看護学科1クラス・栄養学科1クラス)と中級2クラス(同様)、オーラルイングリッシュIの上級4クラス(看護学科2クラス・栄養学科2クラス)は非常勤講師4名(いずれも日本語母語話者)がそれぞれ担当し、英語Iの初級2クラス(看護学科1クラス・栄養学科1クラス)とオーラルイングリッシュIの初級4クラス(看護学科2クラス・栄養学科2クラス)は専任教員1名(日本語母語話者)が担当した。

教科書や評価方法などは原則として各担当者に一任されている。ただし、異なるレベルのクラス間で同一の教科書が使われないよう調整が行われており、その際に使用する教科書の難易度に関しても話し合いのうえ、調整が行われている。また、英語Iに関しては健康や医療に関連した内容の教科書が使われており、オーラルイングリッシュIに関しては原則英語で授業が行われている。

2. 調査方法

2012年度に入学した1年生188名(調査対象者177名を含む)に以下の通りG-TELP Level 4を計3回受験させた。

2012年4月4日(水) プレイスメントテスト実施(Form 410)

2012年7月26日(木) 前期到達度テスト実施(Form 412)

2012年12月12日(水) 後期到達度テスト実施(Form 410)

その後、学科別・レベル別・科目別に平均点と標準偏差を算出し、一要因分散分析(対応あり)と多重比較を行った。尚、有意水準は5%とした。

学科別に平均点と標準偏差を算出し分析した理由は、同じ習熟クラスでもプレイスメントテストの得点幅が学科毎に異なるためである。また、科目別に分析を行った理由は、英語Iはグラマーセクションの得点とリーディング・ボキャブラリーセクションの得点によってクラス分けが行われている一方、オーラルイングリッシュIはリスニングセクションの得点によってクラス分けをしているからである。

IV. 結果

前述したとおり、今回の調査ではG-TELP Level 4を3回実施し、基本統計値を算出したのち、一要因分散分析(対応あり)を行い、各テスト間の平均値の差に統計的な有意な差があるのかどうかを検定し、有意な差が見られた場合はテスト間で多重比較を行い、どのテスト間に有意な差があるのかを学科別、レベル別、科目別に検定した。詳細なデータはスペースの都合上、付表にまとめた。

表3. 平均値の差と有意確率(看護学科)

科目	レベル	プレー前期	前期-後期	プレー後期
英語 I	上級	-10.21 (.004*)	+12.39 (.001*)	+2.18 (.308)
	中級	+6.55 (.025*)	+3.62 (.329)	+10.17 (.006*)
	初級	+21.78 (.000*)	+1.61 (.730)	+23.39 (.000*)
オーラル イングリッシュ I	上級	+5.54 (.007*)	-4.19 (.051)	+1.35 (.533)
	初級	+13.37 (.000*)	+1.63 (.550)	+15.00 (.000*)

*p<.05

1. 結果：看護学科

表 3 は、英語 I とオーラルイングリッシュ I の各テスト間の平均値の差と多重比較をした際の有意確率を表している。「プレ」はプレースメントテスト、「前期」は前期到達度テスト、「後期」は後期到達度テストを示している。また、プラス記号は平均点が上昇したこと、マイナス記号は平均点が下降したことを示し、括弧内の数値は多重比較の際の有意確率を示している。分散分析の結果、有意水準 5% でいずれの場合も $p < .05$ となっており、テスト間における統計的な有意差は認められた。尚、英語 I は 200 点満点（グラマーセクション 100 点＋リーディング・ボキャブラリーセクション 100 点）、オーラルイングリッシュ I は 100 点満点（リスニングセクション 100 点）となっている（表 3）。

英語 I の上級クラスでは、プレースメントテストと前期到達度テストの間で平均点が 10.21 点下降したものの、前期到達度テストと後期到達度テストの間で 12.39 点上昇した。多重比較（有意水準 5%）の結果、プレースメントテストと前期到達度テスト、前期到達度テストと後期到達度テストの間には統計的な有意な得点差は確認されたものの、プレースメントテストと後期到達度テストの間には統計的に有意な得点差は確認されなかった（表 3）。

一方、英語 I の中級クラスでは、プレースメントテストと前期到達度テストの間で平均点が 6.55 点上昇し、前期到達度テストと後期到達度テストの間でも平均点が 3.62 点上昇した。多重比較（有意水準 5%）の結果、前期到達度テストと後期到達度テストの間に統計的に有意な得点差は確認されなかったものの、プレースメントテストと前期到達度テスト、プレースメントテストと後期到達度テストの間で統計的に有意な得点差が確認された（表 3）。

また、英語 I の初級クラスでは、プレースメントテストと前期到達度テストの間で平均点が

21.78 点上昇した。多重比較（有意水準 5%）の結果、前期到達度テストと後期到達度テストの間には統計的に有意な得点差は確認されなかったものの、プレースメントテストと前期到達度テスト、プレースメントテストと後期到達度テストの間に統計的に有意な得点差が確認された（表 3）。

オーラルイングリッシュ I の上級クラスは、プレースメントテストと前期到達度テストの間で平均点が 5.54 点上昇し、多重比較（有意水準 5%）の結果、統計的に有意な差も確認された。しかしながら、前期到達度テストと後期到達度テスト、プレースメントテストと後期到達度テストの間には統計的に有意な得点差は確認されなかった（表 3）。

一方、オーラルイングリッシュ I の初級クラスでは、プレースメントテストと前期到達度テストの間で平均点が 13.37 点上昇した。多重比較（有意水準 5%）の結果、前期到達度テストと後期到達度テストの間には統計的に有意な得点差は確認されなかったものの、プレースメントテストと前期到達度テスト、プレースメントテストと後期到達度テストの間に統計的に有意な得点差が確認された（表 3）。

2. 結果：栄養学科

表 4 も表 3 同様、英語 I とオーラルイングリッシュ I の各テスト間の平均値の差と多重比較をした際の有意確率を表している。「プレ」はプレースメントテスト、「前期」は前期到達度テスト、「後期」は後期到達度テストを示している。また、プラス記号は平均点が上昇したこと、マイナス記号は平均点が下降したことを示し、括弧内の数値は多重比較の際の有意確率を示している。分散分析の結果、有意水準 5% で、英語 I の上級クラスは $p > .05$ となっており、テスト間における統計的な有意差は認められなかった。一方、英語 I の上級クラスを除く他のクラスでは全て $p < .05$ となっており、テスト間における統計的な有意差は認めら

れた。尚、看護学科同様、英語 I は 200 点満点 (グラマーセクション 100 点+リーディング・ボキャブラリーセクション 100 点)、オーラルイングリッ

シュ I は 100 点満点 (リスニングセクション 100 点) となっている (表 4)。

表 4. 平均値の差と有意確率 (栄養学科)

科目	レベル	プレー前期	前期-後期	プレー後期
英語 I	上級	-0.97 (N/A)	+4.84 (N/A)	+3.87 (N/A)
	中級	+3.65 (.280)	+6.35 (.061)	+10.00 (.003*)
	初級	+21.61 (.000*)	-3.06 (.413)	+18.55 (.000*)
オーラル イングリッシュ I	上級	+3.64 (.070)	-4.55 (.023*)	-0.91 (.616)
	初級	+12.76 (.000*)	-1.81 (.409)	+10.95 (.000*)

* p<.05

英語 I の上級クラスは、前述したとおり、分散分析 (有意水準は 5%) でテスト間における統計的な有意差は認められなかった (表 4)。

英語 I の中級クラスでは、プレイスメントテストと後期到達度テストの間で平均点が 10.00 点上昇し、多重比較 (有意水準 5%) の結果、統計的な有意差も確認された。しかしながら、プレイスメントテストと前期到達度テスト、前期到達度テストと後期到達度テストの間では統計的に有意な得点差は認められなかった (表 4)。

また、英語 I の初級クラスでは、プレイスメントテストと前期到達度テストの間で平均点が 21.61 点上昇した。多重比較 (有意水準 5%) の結果、前期到達度テストと後期到達度テストの間には統計的に有意な得点差は確認されなかったものの、プレイスメントテストと前期到達度テスト、プレイスメントテストと後期到達度テストの間に統計的に有意な得点差が確認された (表 4)。

オーラルイングリッシュ I の上級クラスでは、前期到達度テストと後期到達度テストの間で平均点が 4.55 点下降し、多重比較 (有意水準 5%) の結果、統計的な有意差も確認された。プレイスメントテストと前期到達度テスト、プレイスメント

テストと後期到達度テストの間には統計的に有意な得点差は認められなかった。

一方、オーラルイングリッシュ I の初級クラスでは、プレイスメントテストと前期到達度テストの間で平均点が 12.76 点上昇し、多重比較 (有意水準 5%) の結果、統計的な有意差も確認された。前期到達度テストと後期到達度テストの間に統計的に有意な得点差は認められなかったものの、プレイスメントテストと後期到達度テストの間で有意な差が確認された (表 4)。

3. 結果：まとめ

上記を踏まえ、以下のとおり結果をまとめた。

- ① 学科や科目にかかわらず、初級クラスは前期の 4 か月で得点が大幅に上昇するが、後期の 4 か月では得点が伸びなかった。
- ② 学科にかかわらず、中級クラスは初級クラスほどではないものの、前期・後期の 8 か月間で得点はある程度上昇した。
- ③ 上級クラスは得点が一部下降する場合があったものの、前期・後期の 8 か月間で得点の上昇や下降はみられなかった。

付表 1. 基本統計値 (看護学科・英語 I・上級クラス N=23)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	23	170	195	176.30	7.419
前期到達度テスト	23	130	190	166.09	14.921
後期到達度テスト	23	160	200	178.48	10.383

付表 2. 一要因分散分析の結果 (看護学科・英語 I・上級クラス N=23)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	2013.768	2	1006.884	10.296	.000*
群内	4177.536	22	189.888		
誤差	4302.899	44	97.793		
合計	10494.203	68			

* p < .05

付表 3. 多重比較の結果 (看護学科・英語 I・上級クラス N=23)

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	10.217*	3.198	.004	3.586	16.849
	後期	-2.174	2.081	.308	-6.490	2.142
前期	プレ	-10.217*	3.198	.004	-16.849	-3.586
	後期	-12.391*	3.310	.001	-19.256	-5.527
後期	プレ	2.174	2.081	.308	-2.142	6.490
	前期	12.391*	3.310	.001	5.527	19.256

* p < .05

付表 4. 基本統計値 (看護学科・英語 I・中級クラス N=29)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	29	135	165	149.14	9.643
前期到達度テスト	29	110	180	155.69	16.941
後期到達度テスト	29	110	190	159.31	20.862

付表 5. 一要因分散分析の結果 (看護学科・英語 I・中級クラス N=29)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	1541.954	2	770.977	4.902	.011*
群内	14017.816	28	500.636		
誤差	8808.046	56	157.287		
合計	24367.816	86			

* p < .05

付表 6. 多重比較の結果 (看護学科・英語 I・中級クラス N=29)

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	-6.552*	2.764	.025	-12.214	-.889
	後期	-10.172*	3.407	.006	-17.151	-3.194
前期	プレ	6.552*	2.764	.025	.889	12.214
	後期	-3.621	3.646	.329	-11.089	3.848
後期	プレ	10.172*	3.407	.006	3.194	17.151
	前期	3.621	3.646	.329	-3.848	11.089

* p < .05

付表 7. 基本統計値 (看護学科・英語 I・初級クラス N=28)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	28	60	130	104.29	20.079
前期到達度テスト	28	85	160	126.07	21.532
後期到達度テスト	28	80	175	127.68	24.247

付表 8. 一要因分散分析の結果 (看護学科・英語 I・初級クラス N=28)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群内	9561.310	2	4780.655	17.262	.000*
群間	24322.321	27	900.827		
誤差	14955.357	54	276.951		
合計	48838.988	83			

* p < .05

付表 9. 多重比較の結果 (看護学科・英語 I・初級クラス N=28)

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	-21.786*	4.792	.000	-31.618	-11.953
	後期	-23.393*	3.884	.000	-31.361	-15.424
前期	プレ	21.786*	4.792	.000	11.953	31.618
	後期	-1.607	4.615	.730	-11.077	7.862
後期	プレ	23.393*	3.884	.000	15.424	31.361
	前期	1.607	4.615	.730	-7.862	11.077

* p < .05

付表 10. 基本統計値 (栄養学科・英語 I・上級クラス N=31)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	31	155	175	162.58	6.692
前期到達度テスト	31	130	190	161.61	14.910
後期到達度テスト	31	145	190	166.45	11.416

付表 11. 一要因分散分析の結果 (栄養学科・英語 I・上級クラス N=31)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	406.452	2	203.226	1.624	.206*
群内	4412.366	30	147.079		
誤差	7510.215	60	125.170		
合計	12329.033	92			

* p < .05

付表 12. 基本統計値 (栄養学科・英語 I・中級クラス N=26)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	26	130	150	139.81	7.935
前期到達度テスト	26	110	170	143.46	16.719
後期到達度テスト	26	115	175	149.81	14.865

付表 13. 一要因分散分析の結果 (栄養学科・英語 I・中級クラス N=26)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	1331.410	2	665.705	4.979	.011*
群内	7401.282	25	296.051		
誤差	6685.256	50	133.705		
合計	15417.948	77			

* p < .05

付表 14. 多重比較の結果 (栄養学科・英語 I・中級クラス N=26)

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	-3.654	3.311	.280	-10.474	3.166
	後期	-10.000*	3.063	.003*	-16.309	-3.691
前期	プレ	3.654	3.311	.280	-3.166	10.474
	後期	-6.346	3.241	.061	-13.021	.329
後期	プレ	10.000*	3.063	.003*	3.691	16.309
	前期	6.346	3.241	.061	-.329	13.021

* p < .05

付表 15. 基本統計値 (栄養学科・英語 I・初級クラス N=31)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	31	65	125	106.45	17.185
前期到達度テスト	31	75	180	128.06	21.474
後期到達度テスト	31	65	165	125.00	24.732

付表 16. 一要因分散分析の結果 (栄養学科・英語 I・初級クラス N=31)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	8479.032	2	4239.516	24.293	.000*
群内	30572.581	30	1019.086		
誤差	10470.968	60	174.516		
合計	49522.581	92			

* p < .05

付表 17. 多重比較の結果 (栄養学科・英語 I・初級クラス N=31)

(I)テスト (J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
				下限	上限
プレ 前期 後期	-21.613*	2.973	.000	-27.684	-15.541
	-18.548*	3.362	.000	-25.414	-11.683
前期 プレ 後期	21.613*	2.973	.000	15.541	27.684
	3.065	3.693	.413	-4.478	10.607
後期 プレ 前期	18.548*	3.362	.000	11.683	25.414
	-3.065	3.693	.413	-10.607	4.478

* p < .05

付表 18. 基本統計値 (看護学科・オーラルイングリッシュ I・上級クラス N=37)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	37	60	80	67.03	5.829
前期到達度テスト	37	45	90	72.57	11.094
後期到達度テスト	37	40	85	68.38	12.696

付表 19. 一要因分散分析の結果 (看護学科・オーラルイングリッシュ I・上級クラス N=37)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	617.568	2	308.784	3.936	.024*
群内	5807.658	36	161.324		
誤差	5649.099	72	78.460		
合計	12074.325	110			

* p < .05

付表 20. 多重比較の結果（看護学科・オーラルイングリッシュ I・上級クラス N=37）

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	-5.541*	1.955	.007	-9.505	-1.576
	後期	-1.351	2.146	.533	-5.703	3.000
前期	プレ	5.541*	1.955	.007	1.576	9.505
	後期	4.189	2.073	.051	-0.16	8.394
後期	プレ	1.351	2.146	.533	-3.000	5.703
	前期	-4.189	2.073	.051	-8.394	.016

* p < .05

付表 21. 基本統計値（看護学科・オーラルイングリッシュ I・初級クラス N=49）

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	49	20	55	43.47	9.853
前期到達度テスト	49	15	90	56.84	18.077
後期到達度テスト	49	25	90	58.47	13.509

付表 22. 一要因分散分析の結果（看護学科・オーラルイングリッシュ I・初級クラス N=49）

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	6637.075	2	3318.537	24.896	.000*
群内	16308.844	48	339.768		
誤差	12796.259	96	133.294		
合計	35742.178	146			

* p < .05

付表 23. 多重比較の結果（看護学科・オーラルイングリッシュ I・初級クラス N=49）

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	-13.367*	2.189	.000	-17.768	-8.966
	後期	-15.000*	2.041	.000	-19.014	-10.896
前期	プレ	13.367*	2.189	.000	8.966	17.768
	後期	-1.633	2.714	.550	-7.089	3.823
後期	プレ	15.000*	2.041	.000	10.896	19.104
	前期	1.633	2.714	.550	-3.823	7.089

* p < .05

付表 24. 基本統計値 (栄養学科・オーラルイングリッシュ I・上級クラス N=44)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	44	55	85	63.75	8.078
前期到達度テスト	44	45	90	67.39	11.335
後期到達度テスト	44	35	90	62.84	10.912

付表 25. 一要因分散分析の結果 (栄養学科・オーラルイングリッシュ I・上級クラス N=44)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	509.091	2	254.545	3.216	.045*
群内	6642.992	43	154.488		
誤差	6807.576	86	79.158		
合計	13959.659	131			

* p < .05

付表 26. 多重比較の結果 (栄養学科・オーラルイングリッシュ I・上級クラス N=44)

(I)テスト (J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
				下限	上限
プレ 前期	-3.636	1.960	.070	-7.589	.316
後期	.909	1.798	.616	-2.716	4.534
前期 プレ	3.636	1.960	.070	-.316	7.589
後期	4.545*	1.929	.023	.655	8.436
後期 プレ	-.909	1.798	.616	-4.534	2.716
前期	-4.545*	1.929	.023	-8.436	-.655

* p < .05

付表 27. 基本統計値 (栄養学科・オーラルイングリッシュ I・初級クラス N=47)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
プレイスメントテスト	47	20	50	40.43	7.997
前期到達度テスト	47	25	85	53.19	12.998
後期到達度テスト	47	25	75	51.38	11.019

付表 28. 一要因分散分析の結果 (栄養学科・オーラルイングリッシュ I・初級クラス N=47)

変動因	平方和	自由度	平均平方	分散化(F)	有意確率(P)
群間	4485.461	2	2242.730	22.191	.000*
群内	7000.000	46	152.174		
誤差	9297.872	92	101.064		
合計	20783.333	140			

* p < .05

付表 29. 多重比較の結果（栄養学科・オーラルイングリッシュ I・初級クラス N=47）

(I)テスト	(J)テスト	平均値の差 (I)~(J)	標準偏差	有意確率	95%平均差信頼区間	
					下限	上限
プレ	前期	-12.766*	2.192	.000	-17.179	-8.353
	後期	-10.957*	1.842	.000	-14.664	-7.251
前期	プレ	12.766*	2.192	.000	8.353	17.179
	後期	1.809	2.169	.409	-2.557	6.174
後期	プレ	10.957*	1.842	.000	7.251	14.664
	前期	-1.809	2.169	.409	-6.174	2.557

* p < .05

V. 考察

ここでは結果に関して、入学形態などの要因から考察を加える。

英語 I の初級クラスでは、前期の 4 か月で看護学科も栄養学科も 22 点ほど平均点が上昇しており（表 3、表 4）、オーラルイングリッシュ I の初級クラスでも 13 点ほど平均点が上昇している（表 3、表 4）。しかしながら、後期の 4 か月間は統計的に有意な得点の上昇・下降はなかった。

初級クラスに在籍する学生の多くは、推薦入試を経て T 大学に入学した学生である。一般的に推薦で入ってくる学生は、前年の 11 月頃に入学が決まるため、それ以降は入試対策などを通じて積極的に英語に触れることはないと言われている。つまり、高校時代にある程度英語力があつたとしても、入学が決まってから実際に入学するまでの期間で英語力が落ち、プレイスメントテスト実施時に本来の力を発揮できていない学生も少なからず存在する可能性が考えられる。そのような学生が初級クラスで基礎的な内容を復習することで本来の英語力を取り戻し、前期到達度テストで大幅に得点が上昇した可能性は否定できない。

前期の 4 か月に英語力が伸びる一方、後期の 4 か月では得点は伸びなかった。これは、中級クラスの伸長度が初級クラスに比べ低いことや上級クラスでは英語力の伸びが確認されなかったことと関係しているように思える。つまり、ある程度の

レベルに達すると、英語力は簡単には伸びることはなく、初級クラスは前期終了時にそのレベルに達したため、後期に得点は伸びなかったのではという考えである。

このことは中級クラスが、前期の 4 か月で大幅に得点が上昇した初級クラスとは異なり、前期・後期の 8 か月をかけてゆっくり得点が上昇したことからも推察できる。また、上級クラスの英語力の伸長が前期・後期の 8 か月を通して確認できなかったことから推察できる。

もちろん、今回の調査で使用した G-TELP Level 4 が上級クラスや中級クラスの学生には難易度が低すぎた可能性も否定できない。特に上級クラスでは天井効果が発生し、伸長度を正確に計測できていない可能性も考えられる。

VI. 今後の課題

本研究では、G-TELP Level 4 を入学時、前期終了時、後期終了時に実施し、1 年生の英語力の変化を学科別・習熟度別・科目別に比較した。学科や科目によって若干結果は異なるものの、学科間および科目間で共通していたのは、初級クラスに在籍する学生の得点が前期期間中に大幅に上昇したことであった。このことから習熟度別クラス編成は、英語力が低い学生に効果があることが示唆された。

しかしながら、習熟度別クラス編成だけが英語

力伸張の要因となっているわけではない。授業方法や使用する教材、宿題や課題の量や学生のモチベーション等、英語力に影響を及ぼす要因は数限りなくあると言える。今後は試験結果を統計的に分析するだけでなく、必要に応じて指導教員や調査対象学生にインタビューをしたり、アンケートを配布したりして、英語力の伸長に影響を与える要因と得点の関係などを明らかにしていくことが必要であると言える。

また、今回の調査では上級クラスに英語力の伸長が見られなかったなど、英語力がある程度に達すると、そこからさらに力を伸ばすことが難しいことも示唆された。もちろん、これに関しては、使用した G-TELP Level 4 が妥当性や信頼性を調査対象学生に対して有していたのかなども検討したうえで考えなければならないテーマであると言える。

もちろん今回の結果を一般化することは難しい。研究参加者が 177 名と少なかったため、各クラスの調査対象者数は 30 名前後、多くても 50 名程度であった。同様の調査を引き続き継続していくことで、より信頼性の高いデータを得ることができらるであろう。

学生間の英語力の格差が広がり、多くの大学で習熟度別授業が行われるようになった。到達度目標を設定し、効果的な授業を行うことで学生の力を伸ばしていくことが以前にも増して求められている。今回の調査が現場の教育者たちの参考となることを願っている。

引用文献

- 1) 佐藤美津子：「大学入試の多様化と学力格差」『多摩大学グローバルスタディーズ学部』3, 81-92. 2010.
- 2) 小野博：「基礎英語力低下の現状と改善策＜上＞中・高・大学生の英語力はなぜ下がったか」『英語教育』54 (11), 63-67, 2006.
- 3) 大学英語教育学会実態調査委員会：『わが国の

外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学の学部・学科編—』大学英語教育学会, 2002.

- 4) 杉森幹彦：「英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定および測定に関する実態調査の報告」『政策科学』10 (3), 3-26, 2003.
- 5) 小笠原真司：「英語習熟度別クラスの効果と G-TELP による成績分析—工学部総合英語Ⅲのデータを中心に—」『大学教育機能開発センター紀要』2, 9-19, 2011.
- 6) 小笠原真司：「長崎大学学生の英語力伸張に関する研究—1年間の G-TELP のデータから—」『長崎大学言語教育研究センター紀要』1, 47-66, 2013.

参考文献

- 1) 浅野幸子：「入試形態による英語コミュニケーション能力の格差」『大阪体育大学紀要』39, 121-135, 2008.
- 2) 早瀬博範：「始まる、佐賀大学英語教育の改革」『大学教育年報』2, 67-76, 2006.
- 3) 丸山真澄：「長崎大学経済学部生の英語習熟度 (1) 二つの英語試験と TOEIC 得点の観点から」91 (1-2), 93-113, 2011.
- 4) 丸山真澄：「長崎大学経済学部生の G-TELP スコアに見る英語習熟度の伸長に関する考察」『経営と経済』9 (1-2), 117-150, 2012a.
- 5) 丸山真澄：「長崎大学経済学部生の G-TELP (レベル 3) と TOEIC スコア—記述統計と換算式からの検討—」『経営と経済』92 (3), 71-91, 2012b.
- 6) 富岡龍明：「平成 20 年度英語教育改革実践の軌跡」『鹿児島大学教育センター年報』6, 1-14, 2009.
- 7) 富岡龍明：「鹿児島大学英語教育改革報告書：平成 20 年度—平成 21 年度前期」『鹿児島大学教育センター年報』1-40, 2010.